

『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』における
「教養」に関して

—その2. 「教養」の問題から見た「美しき魂」の位置—

下 村 喜 八

(文理学部独文研究室)

Über die „Bildung“ in „Wilhelm Meisters Lehrjahre“

—Zweiter Teil. Stellung der „Schönen Seele“
in Problemen der Bildung—

Kihachi SHIMOMURA

(I)

『修業時代』の中に挿入されている『美しき魂の告白』は、さまざまな人生の出来事を通して<目に見えない方(神)>との交わりが次第に深められてゆき、それと同時に彼女自身の本質も純粋にされ、高められてゆく一人の病弱な女性の成長・形式の足跡である。この、厳粛とも言えるほどに一途な、しかしまた静かな生の形成に接して、我々の心は引き締められ、また浄められるのを感じる。この敬虔な魂にとって神との関係が根本的に重要であり、神との交わりの中にある時の心の状態、感情が、彼女の人格を成り立たせる経験的な根本条件である。この神との関係をいかに強固なものに、いかに純粋なものにしてゆくかが、この女性の生の一切の関心事となってゆく。彼女は、神に近づくことを得た時、今まで堅く硬化していた Seele が動き始め、失われていた自己、いわば精神的には生きていないのと同じであった自己を再び取り戻すことが出来る。彼女は神との交わりの中に、心の平和と喜びと自由を見出す。また神との関係は、どんな不幸・艱難の中にあっても彼女の存在を支える支柱である。むしろ不幸・艱難は、神との交わりを深める契機として、従ってまた、彼女の存在の土台をより強固にする契機として働くと言った方がよい。この神との交わりを深め、強固にし、純粋にしてゆく歩みの中で、彼女は、この魂の交わりを妨げるものを一切排除してゆこうとする。その結果として、同時に、この世における彼女の存在自体も高められ、浄化されてゆく。その過程で彼女は、外から見た場合、非常に大きな犠牲を払うことになる。彼女の生活と内面を散漫にする<馬鹿げた娯楽や社交>を避け、また Narziß との結婚を犠牲にすることになる。しかし、外からは大きな犠牲に見えても、それは彼女にとっては犠牲でも、禁欲でも、冷たい義務でもない。それは、彼女には、闘い (Streit) も緊張 (Spannung) もなく、ごく自然に出来てゆく。

„ich wußte aus Erfahrungen, die ich ungesucht erlangt hatte, daß es höhere Empfindungen gebe, die uns ein Vergnügen wahrhaftig gewährten, das man vergebens bei Lustbarkeiten sucht, und daß in diesen höhern Freuden zugleich ein geheimer Schatz zur Stärkung im Unglück aufbewahrt sei.“¹⁾

この、神との間に成り立つ<より高い感情> (die höhere Empfindungen) とそが彼女のあらゆる選択・行動の指針であり、またエネルギーでもある。この<より高い感情>によって、煩わしいことの多い宮廷生活においても、病臥の折にも、家庭の不幸の際にも、それらを確かな足取りで静かに切り抜けてゆく。彼女がこの世の諸事を乗り越えてゆく様は、あたかも自分の身に生来こびり着

いた<鋳滓> (Schlacken) を振り払って、精錬された像を刻んでゆくようであり、また、地上的な愛がもたらす<感情>をも乗り越えてゆく彼女の歩みは、ばらばらで不統一な自己を一つの意味ある統一へとまとめ上げてゆくようである。教義を嫌い、ドグマを嫌い、戒律 (Gesetz) や冷やかな義務の次元を越え出て、神との、常に新しい、生々しい純粋な関係を唯一の指針とし、またエネルギーとして、彼女は倫理的な高みへと自己を形成してゆく。

しかしながら『告白』の最後では、この「美しき魂」への批判がなされている。宗教は確かに彼女の生における本質的な要素であるけれども、我々の注意を要求する他の領域もあることを知らねばならない。即ち、感覚的な人間文化の世界に彼女が全く盲目であることが指摘される。美しき魂の叔父は、彼女の内的な道徳的本性 (ihre innere sittliche Natur) の教養を高く評価しながらも、内的生 (das innere Leben) ばかりを育てる危険性を指摘する。

„und wir sehen daraus, daß man nicht wohl tut, der sittlichen Bildung einsam, in sich selbst verschlossen nachzuhängen; vielmehr wird man finden, daß derjenige, dessen Geist nach einer moralischen Kultur strebt, alle Ursache hat, seine feinere Sinnlichkeit zugleich mit auszubilden, damit er nicht in Gefahr komme, von seiner moralischen Höhe herabzugleiten, indem er sich den Lockungen einer regellosen Phantasie übergibt und in den Fall kommt, seine edlere Natur durch Vergnügen an geschmacklosen Tändeleien, wo nicht an etwas Schlimmerem herabzuwürdigen.“²⁾

そしてまた、彼女自身、叔父の館で芸術作品に面した時、ここで始めて、この世の物によって自身が攪乱されないのを感じる。それどころか自分自身にひきもどされるのを感じる。ここに我々は美しき魂が、高い人間文化と出会うことによって、そこに自己のあるべき姿を見出し、見出すことによって外に対して今まで閉られていた内面性が開かれ、外との関係と緊張を保ちながら自己形成してゆく姿を望みみる。美しき魂における高い倫理性と、感覚的人間文化が結び合され、調和的に統一される可能性の光が差し始めるのを望み見るのであるが、しかし、『告白』は、美しき魂に感覚性が全く欠落したままの姿で閉られている。

* * *

この「美しき魂」ないし『美しき魂の告白』は、それ独自として取り出して、あるいはまた<Lehrjahre>全体から見た上でも、今まで、さまざまな角度からさまざまな解釈や評価がなされて来た。私自身にとっても、「美しき魂」の位置付けは前々からの懸案であった。今、これを「教養」の問題から位置付けてみたいと思う。

(II)

「美しき魂」のさまざまな評価の中で、教養の問題から扱った代表的な、また説得力のある一例を示すことから始めよう。大きな波紋を投げかけた Kurt May の論文、„Wilhelm Meisters Lehrjahre, ein Bildungsroman?“ での評価は以下のようなものである。この論文で Kurt May は、他の諸形態と同様、主人公 Wilhelm に対する教養価値としての「美しき魂」を、<調和的・普遍的・全的教養>という教養理念を尺度として鋭く分析し、批判している。

「彼女の、世界と感性とに關係を断った敬虔には、もっぱら審美的な生活態度を持つ主人公の一面性と比較できるものがある。ここで新たな一種の萎縮した姿を示す彼女の人間性は、人間存在の大きく豊かな可能性を尺度とすると、ヴィルヘルムに於てと劣らず断片的である。この宗教的人間には審美的・感覚的価値領域が欠けている。その上に倫理的・社会的・実践的価値実現が欠けていることはもっとゆゆしきことである。(中略) 美しき魂は芸術も学問も分らないし、実践的愛も

持っていない。それ故彼女は豊かさという点で貧しい。この小説の、形象された世界の中でこれまでに打ち建てられて来た、最も厳格、かつ最も高い尺度に照してみても貧しい。彼女は教養において貧しく萎縮している。」³⁾

Kurt May はこの作品《Lehrjahre》を解釈するにあたって、作品の外から持って来た＜古典的教養理念＞とか、自然科学的な＜変様の理論＞や、ゲーテの学問的世界観をこの作品の教養理想に入れるのは危険であるとし、教養理念は最初からはないものとして作品を見てゆこうとする。そして「一個の、自己を教養してゆく人間が、そのような人間として成長してゆく中で、一段一段成就し充たしてゆく意味と価値の内容、現に今そしてここで実現されてゆく意味と価値の内容が我々の関心事である」⁴⁾ としている。これは作品解釈上正しい方法と言えよう。そして Kurt May は、作品のちょうど前半分にあたる Werner への手紙までの部分の中から、＜調和的・全人的教養理念＞を導き出してくる。そしてこの教養理念の成就が目的となり、主人公によって自覚的に追求され、それが積極的に、具体的に、本質規定的に、かつ規範的に実現された時、この作品が教養小説になるとする。そしてこの尺度でもって今後作品を分析してゆく。この分析と解釈は鮮かで見事という他はない。しかしながら、登張氏⁵⁾ も、また猿田氏⁶⁾ も指摘しておられるように、定められた目標を重視するあまり、目標に至る主人公の発展の過程を軽視しているということが言える。このことから、作品そのものの中から教養理念を導き出しておきながら、この作品の後半部の分析と解釈が外在的になってきている。作品を解釈する場合、どのような尺度でもって評価するかによって浮かび上がってくるものが変化してくる。このことを Kurt May の論文は端的に表わしている。Kurt May においては、教養小説規定が明確であるだけ、一面で作品がきわめて明瞭な光のもとに照し出されている。しかしまた反面、多くのものが否定の底に沈んでいるように思う。私は今、この作品の後半部においても、この作品が表現している「教養」の中に内面的に入っていって、その姿を抽出したいと思う。Kurt May が同じ論文の最後の辺で、「ヴィルヘルム・マイスターは、自己を調和的に形成するというこのかわりに、倫理的に行為しながら世界と関わり合い、そしてそのことによって人類全体に役立つ者となる為に自分を一つの器官 (Organ) とすることへ導いてゆかれ、また同時に内から発展させられていった。これによってヴィルヘルムは、確かに、自分が望みまた考えていたよりもはるかに少しのことしか実現しなかった。しかし彼は、人間個人の限界内で、自分の資質にふさわしい形で、具体的に実現され得たものを獲得した。この＜より少なさ＞は同時に＜より多いこと＞を意味する。」⁷⁾ このように最後では「限定的教養」を肯定しながらも、この論文の性格上やむを得ないことかも知れないが、その＜より多いこと＞に関しては取り上げられていない。私の立場は、この＜より少ないこと＞、即ち「限定」が、教養形成過程をたどる中で、積極的な、また自然必然の意味と内容を持つならば、そのことを肯定することになる。

(III)

本論に入るに先立って、まず Wilhelm の自己形成の歩みを、段階的にごく簡単に振り返っておきたいと思う。(1) 第一段階 (第1巻第1章から第5巻第3章まで) —— Wilhelm は第5巻第3章の Werner への手紙の時点までは、無意識的に自己の教養形成をめざして来たと言える。Kurt May は、主人公が自己の内部に典型 (Vorbild) あるいは原像 (Urbild) の基本的性格と意義を自覚し、そしてこの形成されるべき人間の意味と内容に向って、理性と意志を持った人間として自発的に歩み始める時にはじめて「教養」が語られうるとの主旨のことを語っている⁸⁾ (頭点の本論文の筆者)。教養をこのように自覚的なものと規定するならば、この第一段階は教養過程にまだ入らないことになる。しかし私は、拙論＜その1＞⁹⁾ において取り扱ったように、Wilhelm の無自覚的な歩みの中に教養の根本的な条件の一つを認める故、この段階をも教養過程の重要な一段階と見

なしたい。(2) 第二段階(第5巻第3章から『告白』まで)——Werner 宛の手紙においてはじめて、自覚的に<自己の資質の全的・調和的發展>を目差して歩む意志が語られる。しかしその後の舞台生活においては、目標に向かっての意識的努力は見られない。(3) 第三段階(『告白』以後)——『美しき魂の告白』を境に、<全資質の調和的形成>という全的教養から、自己の限界を知りその限界内で自己形成をなすという、限定付き教養へと転換してゆく。限界内での教養とは、無条件に自己の全資質の調和ある形成をめざし全的普遍的人間像を求めるのではなく、与えられた資質の中でも特にその人独自の美質、あるいは個性の教養である。このように教養が限定的となると同時に、社会に開かれた教養と、また、教養における<活動(Tätigkeit)>の大切さが強調されてくる。即ち、自己が自己の資質にふさわしく、社会の一つの器官(Organ)となり、自己の役割を社会の中で積極的に果してゆきつつ、自己が形成されてゆき、また社会も形成されてゆく。このように、教養とは終ることのない形成実現である。しかしながら、限定つき教養といっても、全く限定の中に安んじるのでも、また、Wilhelm が第5巻第3章で市民的人間像として鋭く批判した意味での<分裂>¹⁰⁾の中に安んじるのでもなく、後で触れるように、この段階後もやはり全体への志向、調和的教養への志向は生き続けている。この<限定>は、敗北的妥協ないし諦めではなく、社会との関係の中で調和をさぐろうとするとところから出て来た限定であり、積極的な意味を持っている。(尚、因に、教養は<Lehrjahre>の終結においてははまだ達せられておらず、<Wanderjahre>を視野に入れることによって始めて、Meister-romane における教養の問題を全的にとらえることが出来る。そして<Lehrjahre>は、主人公が社会に向かって開かれた教養に目覚め、社会に向って歩み出す段階で終わっている。この時点で主人公は、今までの歩みの中で自分の資質が舞台には向いていないことを知ったが、しかしまだ社会の中でどのような具体的役割を果すべきか、また、そのために自分に与えられている資質は何なのかは知らない)。

以上がごく簡単に概観したこの小説の中での教養の段階であるが、この教養の段階の中での「美しき魂」の位置と意味を探ってみたいと思う。

教養の問題から見た場合、『告白』ないし「美しき魂」は、三つの意味で分岐点となっている。まず第一に、<全資質の調和的形成>という全的教養形成から、自己の限界内で自己形成するという、限定付き教養へ移行するちょうど分岐点にあたること。第二に、『告白』の終りの部分から、社会に開かれた教養と、教養における<活動>の大切さが強調され始めること。第三に、今までは作者は主人公の自己形成する過程を追って来たが、『告白』を境として、主人公の中に教養の形成過程を追うのに充分でなく、理想を実現されたものとして、客体の中にそれを示そうとする傾向がきわめて大きくなること。以上の三つの意味で分岐点をなしている『告白』、ないし「美しき魂」をどのように評価し位置付けるかは、この作品全体の教養について考える場合、非常に重要な問題になってくると言える。

我々はまず最初に、主人公の教養という観点から見た『告白』ないし「美しき魂」の持つ意味と、また、その問題点を考え——これは主に作品構成上から見た『告白』の位置付けとなる——、そして次には、教養要素としての「美しき魂」自体の中に表現されている教養と、その問題点をさぐりたいと思う。

(IV)

I. 「美しき魂」が主人公に与える影響.

この小説<Lehrjahre>の中で、Wilhelm が、今まで出会った人々、世界から、さまざまなものを摂取して自己を形成して来たように、この『美しき魂の告白』も、構成上の問題として、Wilhelm の教養に対して、教養価値ないし教養要素として作用するように仕組まれている。

ゲーテは、この小説《Lehrjahre》に関して、構成面から見た失敗・不完全さを自ら語っている¹¹⁾が、反面また私には、『告白』はこの構成上の苦心の作ではないかと思われる。それは、全く異質のものを劇中劇のように挿入することは、構成上からはきわめて大胆な試みであり、確かに、今までの Handlung と直接には全く関わりのないものを挿入することにより、Handlung を分断してしまっていることは否めない。しかしながらこの分断は、『告白』が挿入されない場合に生じる断絶よりは、より良いのではないかと思われるからである。この点に関して、柏原氏の論文『ヴィルヘルム・マイスター覚え書き』¹²⁾によって教えられるところ大であった。我々は、描かれている世界の精神の高さから見て、また、全体的調子の高さから見て、第1巻から第5巻までと、第7、8巻との間には、はっきりとした差異のあることに気付く。もし『告白』がなければ、このギャップは、構成として、致命的と言えるほどに大きい。E. Staiger は、この『告白』の着想を得てはじめて、《Sendung》から《Lehrjahre》へと書き進むことが出来たと述べている¹³⁾。『告白』は、この差異・断絶を和らげるため、気付かせないようにする為の架橋の、また緩衝の役割を果たしている。

E. Staiger はさらに、「さて、我々読者はこの相当の長さの特殊な性格をもつ敬虔な書に沈潜してしまう。するとその終りに近づく頃には、以前の世界は遠くへ押しやられる。我々読者は、『告白』を同時に読んでいるヴィルヘルム・マイスターと共に成長を遂げ、彼の傍で成熟し、そしてありがたいことにもはや文体の断絶などは忘れてしまって、より高貴な人間の圏内へ導かれる」¹⁴⁾と述べる。Bildungsroman の観点からは、後に触れるように大きな問題が残るが、私も柏原氏と同様、「この小説の第7、8巻の世界は、Wilhelm Meister が、この『美しき魂の告白』を読み、しかもその読書から大きな影響を受けたという事実をふまえて構成されている」¹⁵⁾と思う。

では、Wilhelm Meister が『告白』の読書から、どのような影響を受けたという仮想のもとに、第7、8巻が成り立っているのかを考えておきたい。

ゲーテが構成上で期待している事柄として、まず、(1)主人公の精神は、一種の高揚・浄化を受け、より高い精神の世界へ入ってゆける準備がなされる点が挙げられる。このこと的一端を F. Schiller はすでに、Handlung の面から見抜いて、1796年6月28日付ゲーテ宛の手紙で次のように述べている。「この第8巻が第6巻にいかにもすばらしく結びついているか、そもそものか多くのことが第6巻に先取りされ、伏線となっているかがはっきりとわかります。(中略)第8巻でこの家庭が本当に現われてくる前から、もう久しくこの家庭とは知り合いになっているので、まったくいつから知り合いになったのかわからないような気がします」¹⁶⁾これは単に Handlung の面からのみならず、精神的な質の面からも言える事柄と思う。その一例として、今までに何度か指摘されて来たことだが、『告白』は、特に、Wilhelm が Natalie の本質に触れる前にそれへの良き準備を与えている点が挙げられる。美しき魂の叔父は Natalie を美しき魂から遠ざけて教育したが、Natalie は誰よりも美しき魂の本質に一番近い。「美しき魂」は Natalie が生まれる為の基盤であり、精神的な生みの母だとも言える。Natalie は美しき魂の豊かな内面性と倫理性を受継いでいる。この内面性と倫理性に活動性(Tätigkeit)がプラスされているのが、そして美しき魂を克服しているのが Natalie である。

人間姿勢の価値序列を判断するのは非常に困難な問題であり、出来得る限り慎重でなければならない。しかしながら、「美しき魂」以後の世界は今までの世界に比べて精神的により高い世界へと登ってゆくように思えるのも否定し難い。それはいかなる意味で高いといえるのであろうか。次にこの点について考えておきたい。まず、(1) F. Gundolf の言葉を借るならば、美しき魂以後、我々は精神的自由によってこの世的諸拘束を超越している圏へと入ってゆく¹⁷⁾。すなわち我々は、自己のこの世的関心(エゴイズム)を脱して、より高いヒューマニスティックな理想に向って歩んで

いる人々の中に入ってゆく。次に、(ロ) 美しき魂の中に純粋性の高まりを認めることができる。教養について考える場合、全面性や豊かさと共に、純粋性をも視野に入れるべきかと思う。我々は、美しき魂の歩みの中に、自己の内部にある本性をいかに純粋にしてゆくかの闘いの跡を見る。美しき魂の中には、自己の本性に合わないものとの妥協を廃してゆく、現存在の純粋性がある。そしてまた、(ハ) 内面倫理の高い頂点があると思う。——Wilhelm によって彼女の自主性として称えられている点である——。それは、自己の利益のために善きことを為すのでもなく、また道徳律に縛られ強いられて善きことをなすのでもなく、自然な本性によって、自由と喜びをもって善きことをなすという、F. Schiller によって Kant の倫理の超克とされている点である。美しき魂は『告白』の最後で次のように述べている。

“Ich erinnere mich kaum eines Gebotes, nichts erscheint mir in Gestalt eines Gesetzes, es ist ein Trieb, der mich leitet und mich immer recht fñhret; ich folge mit Freiheit meinen Gesinnungen und weiß so wenig von Einschränkung als von Reue.”¹⁸⁾

F. Schiller の表現をかりれば、「道徳感情が、意志の導きを安心して一時の感情の動きのままにゆだねることができ、そして道徳感情が、この一時の感情の決定と矛盾をきたす危険が全くないところまで、人間のあらゆる時々の感情を保証するに至っている。個々の行為が道徳的であるのではなく、全性格が道徳的」¹⁹⁾ なのである。我々は以上述べた意味で、美しき魂において今までよりも一段と高い世界へ入ってゆく。我々は知らず知らずのうちに、人間的価値のヒエラルヒーを登ってゆく²⁰⁾。

(2) 今まで我々は、ゲーテが構成上期待している事柄として、「美しき魂」は、主人公がより高い精神の世界に入るための準備であるとの点から見て来たのであるが、多くの人が指摘しているように、これはまた、主人公が克服しなければならない世界でもある。次にこの点から考察したいと思う。「尼僧批判は非常に弱くデリケートなアクセントをもってなされている。しかしこの挿話が構成上占めている位置はゲーテの批判の方向を向いている」²¹⁾ との Lukács の言葉が、多くのことに気付く動機となったのであるが、それを整理すると次の三点となる。まず第一に、(イ) 第7、8巻では明らかに＜社会に開かれた教養＞を志向しているにもかかわらず、この『告白』は内面にのみ沈潜した、社会に対して閉られた自己形成の物語であること。第二に、(ロ) 『告白』が尼僧の成長形成だけで終らず、最後に塔の結社の父とも言える叔父を登場させて、美しき魂を批判しつつ第7、8巻に繋いでいること。第三に、(ハ) Wilhelm に視点を移して、Wilhelm がいわば落胆と行き詰まりの時にこの『告白』を読んだことになる点に留意したい。この時点での Wilhelm は、演劇活動から彼の期待していたものが得られず、逆に俳優達の世界にすっかり幻滅している。彼の魂を折に触れてこよなく慰めてくれた琴弾き老人は狂人になってしまった。何かと心を用い世話を焼いた Melina からは裏切られ、また、一緒に意欲に燃えて仕事を始めた Serlo が急速に落ちてゆき、利己的な卑しい動機から彼に背き始めている。また Aurelie の痛ましい死に直面している。このように Wilhelm をめぐる状況が、何重にも重なり合って彼の内面を蝕み、暗く圧迫している。美しき魂の調和ある静かな世界が、破滅してゆく Aurelie の魂に最期の安らぎを与えたと同様、今落胆の内にある Wilhelm の魂をもいたく和らげたと考えられる。しかしまた反面、豊かな内面性と空想性を、すなわち美しき魂と同じ心の性質を十分に持っている Wilhelm が、この内的危機において、美しき魂の内面に触れた場合、美しき魂と同じく自己の内部に退却・沈潜して、観照的で無為な自己形成へ、もっぱら内面の浄化へ誘われる危険性が充分考え得る。しかしながらこの危険な事態は生じない。むしろ、ゲーテが構成上目論んでいる事柄は、Wilhelm がこの危険をも切り抜け克服して、新たに第7、8巻で、社会に向って開かれた自己形成へと歩み出すことではあるまいかと思われる。

以上で我々は、作品の構成上、ゲーテが目論み、また期待したであろうと思われるところを推測したのであるが、しかし、『美しき魂の告白』の講読につれて Wilhelm 自身も成長し、また自己の精神的危険をも克服して、新たに第 7、8 巻で、社会に開かれた自己形成に向かって歩み出すということは、いわば小説構成上の魔術のようなもので、実際には、教養要素・価値としての「美しき魂」の主人公への影響は、この Roman の中で全くと言って良いほど追求されていない。ほんの二箇所においてその影響が説明的に述べられているにすぎない²²⁾。この点が、教養小説論から見たこの作品の大きな問題点の一つである。我々は、教養形成してゆく形姿と、教養形成された形姿とを区別して考えねばならない。教養小説においては、後者よりも前者の形成過程を描き出すことが要求されるからである。美しき魂は、Wilhelm の教養体験とはなっていないという点で、彼が今までに出合って来た人々が果し得たほどの役割を果していない。また、芸術として、Shakespeare の作品が果し得た役割を果していない。(Shakespeare の作品は実際に小説の Handlung の中に入り込んできており、この場合には芸術による教育、あるいは教養を語ることが出来る。しかし『美しき魂の告白』の読書においては、芸術による教養は語ることが出来ない。芸術による単に一時的な心の高揚では教養形成は生じない。この高揚された精神をもって、現実の生活の中で、それと緊張を孕んで持続的に関わり、具体的、積極的な意味実現を目差すのでなければ、そしてまた、その過程を描くのでなければ、教養を云々することは出来ない)。

Wilhelm の出会う人々が彼の教養体験とならないという点は、美しき魂についてのみならず、《Lehrjahre》の後半に於る全ての形姿についていいうる事柄である(例えば、Natalie, Therese, Lothario, Abbé 等)。M. Wundt が指摘したように、《Lehrjahre》の後半においては、ゲーテは主人公の中に教養形成の過程を追うのに充分でなく、理想を、実現されたものとして客体的に示そうとする傾向がきわめて大きくなる²³⁾。故に我々は、「教養」を捕えようとする場合、小説の後半においては、教養形成してゆく形姿(主人公)の中に教養を追求することを一時中止して、教養された形姿(教養要素としての客体)の中に表現されている教養——より正しくは教養理念、なぜなら、教養とは内に安らぐ形姿ではなく、形成してゆく過程の中で具体的な姿をとって実現してゆく意味である故——を追求し、その後で再び、主人公自身の教養形成の考察に入るという手順を取るべきであろう。

(V)

II. 教養要素としての「美しき魂」の中に表現されている「教養」とその問題点。

美しき魂の歩みは、この小説全体の教養形成の中でのまた一つの内面形成の姿である。目標を目差しての自覚的教養形成ではないが、一女性の形成過程であると言える。(Kurt May のように「教養」を、目標を目差しての自覚的形成と規定するならば、我々はこの女性に関して教養を云々することはできない)。

手順として私は、叔父の教養(教育)理念と比較しながら、美しき魂の中に表現されている教養とその問題点をさぐってゆきたいと思う。それは、叔父は『告白』を第 7、8 巻の世界に結びつける役割を果しており、また、第 7、8 巻で展開される世界から見て、肯定的に評価できる人物と言えるからである。叔父は人本主義的教育理念を展開し、直接塔の結社員であったかどうかは明らかではないが、その理念は塔の結社の理性的な生活原理を根拠づけ、かつ雄弁に表現している感が大きい点。(そして塔の結社は、第 7、8 巻で展開される教養において重要な位置を占める)。次に、第 7、8 巻で限定的教養が展開されるが、この叔父が、限定内での教養を主張する最初の人である点。さらにまた、叔父は、第 7、8 巻で強調される<活動性>と、<手近かなこと>を主張する最初の人である点。以上の理由から、我々が美しき魂の位置付けをする場合、叔父の意見に耳を傾け

る必要があると言える。

叔父は「美しき魂」を批判しているけれども、その批判はしかし、前述したような意味での、美しき魂の生あるいは形成の根本態度に対するものではない。美しき魂には、人間本性に対する懐疑と不信があり、彼女にとっては目に見えぬ方が、あるいは目に見えぬ方との関係が、教養形成の一切の指針であると共に、また形成力であるとすれば、一方叔父においては、指針は自分の外なるいかなる規範でも権威でもなく、自由な現実の人間をそのまま肯定し、その人間に内在する Urbild（本来あるべき人間の姿）が指針・尺度である。叔父にとって、教養とは人間存在の自律的自己完成である。即ち、外界を人間の尺度で測ると共に、外界あるいは自己自身を素材として自己の奥深く宿る Urbild と創造力（die schöpferische Kräfte）に従って自己実現しつつ、また自己表現してゆく。このように美しき魂と叔父の、人間性や世界についての根本的立場は全く異なるが、叔父の批判はその根本的態様の違いに向けられてはいない。第6、7、8巻で展開される人本主義的人間形成においては、宗教的形成はその絶対性を奪われてヒューマン化し、一つの人間文化の営みとなり、教養・要素の一つとなって、人本主義的の形成の中に吸収されんとするのであろう。

『告白』のすぐ後に続く章の冒頭で、語り手はそれとなく美しき魂に触れている。

„und was kann uns rühren, als die stille Hoffnung, daß die angeborne Neigung unsers Herzens nicht ohne Gegenstand bleiben werde? Uns rührt die Erzählung jeder guten Tat, uns rührt das Anschauen jedes harmonischen Gegenstandes; wir fühlen dabei, daß wir nicht ganz in der Fremde sind, wir wännen einer Heimat näher zu sein, nach der unser Bestes. Innerstes ungeduldig hinstrebt.“²⁴⁾

我々は、ここで小説の語り手が、「美しき魂」を、＜調和ある対象＞として捕えている点に注目したい。だが、美しき魂は、＜自己の資質の調和的・全的教養＞を成し遂げ得た人間とは勿論言えない。ではここでいわれている調和とはいかなる意味であろうか。

「教養」について考える場合、＜調和＞の問題は重いウエイトを占める問題である。今、我々は調和の意味を次の三つに整理して考えるのが適当かと思う。まず第一に、自己の全資質の調和が挙げられる。（個人における内と外、精神と肉体、本質と現象の調和、また、美的資質、倫理的資質、活動的資質等々、全ての資質の調和である）。ここでは＜人間＞の理念として、全ての人間に妥当する普通人間像が望見されていると言える。次には、全体を指向しながらも人間の限界を認めて、自己の資質に応じての、自己自身との調和である。ここでは、個々人に、その人独自の個性が考えられてくる。自己の個性に合わない方向で自己を教養すると、自己との分裂葛藤に陥ってしまうが、自己の個性にふさわしい方向で自己を教養してゆくなれば、自己が自己自身と和らぐことが出来る。第三には、個と社会との調和が考えられる。ここでは、個と社会との相補・相促的な調和形成・人間性実現が問題となってくる。

以上を踏まえて、「美しき魂」の教養における調和の問題を取り上げたいと思う。叔父は手記の女性に次のように語る。

„Hätten Sie, meine Freundin, deren höchstes Bedürfnis war, mit Ihrer innern sittlichen Natur ins reine zu kommen, anstatt der großen und kühnen Aufopferungen, sich zwischen Ihrer Familie, einem Bräutigam, vielleicht einem Gemahl nur so hin beholfen. Sie würden, in einem ewigen Widerspruch mit sich selbst, niemals einen zufriedenen Augenblick genossen haben.“²⁵⁾

また叔父は「お前は恐らく „das beste Teil“ を選んだのだろう」²⁶⁾とも語っている。以上の叔父の言葉を手がかりに考えてゆくと、「美しき魂」の持つ調和とは、自己の限界内で自己の持って生まれた独自の資質を完成することによって、＜自己自身に成り得ている＞、＜自己自身との一致

調和を得ている」との意味ということが出来よう。小説全体から見た場合、調和の意味がここで変化して来ている。叔父の教養理念は、全体とその統一を指向しながらも、人間個人の限界を認めた、自己限定的教養である。従って、叔父はまた、美しき魂の自己限定を認めている。この小説全体の教養の問題から見た場合、『美しき魂の告白』は、全的教養から限定的教養へ移行するちょうど分岐点の位置を占めているのである。従って、美しき魂の持つ一面性は、これをほとんどの人が指摘しました批判して来たところであるが、彼女の教養は、それが単に限定的・一面的であるという理由からは批判されるべきではない。もしこの一面性故に美しき魂の教養が批判されるならば、この小説全体に視野を移して、Wilhelm および他の諸形姿において表現されている教養も、全て、この面からは批判の対象とならねばならない。むしろ美しき魂が、自分の道徳的・宗教的資質にかなった道を選び取り、その道で自分の資質の完成をめざして絶えざる努力をなしたということは、限定的教養の一つの典型として肯定的に評価されねばならない。

しかしながら、美しき魂の教養形成には重大な欠けがある。それは、＜調和＞の視点から見た場合、前述した第一と第三の意味での調和が欠けているという点から捕えることが出来る。(i) 美しき魂は、＜全体的調和＞への指向が全く見られないという点から批判されなければならない。確かに、この小説の第6巻以後、「教養」は限定の方向に向かうのであるが、しかし全体への指向が全く断念されている訳ではない。我々は、限定的教養を主張する叔父自身において全体への指向が伺えることに注目したい。叔父の場合、我々は、具体的形姿としての叔父からではなく、彼自身の言葉や、彼について語る美しき魂や語り手の言葉を通してしか知ることが出来ないが、叔父において明らかに、＜全体＞と＜統一＞への指向を伺うことが出来る。家の造りつけをしてそこに住む主人の思想と人柄を象徴的に語らせようと目論まれていることが、小説全体にわたって伺えるのであるが、叔父の場合、歩廊も建て増しも全体に調和と統一を持ち、全ての家具も全体と一致調和し、良き秩序の一つの小世界を作っている。大勢の芸術家と一緒に、全体で一つの意味を纏め上げている。また、彼の蔵書も、全体を指向しながら、混乱や錯綜でなく、秩序と統一を保っている。一方塔の結社も、生の多様性、人格の多様性を許し、また、結社内での個人の個性に応じた自由な活動を許す非常に包容力のある団体である。義則氏の指摘にもあるように²⁷⁾、『Lehrjahre』の終末部が持っているあいまいさと、逆に、そのあいまいさが孕んでいる可能性の豊かさと広さを思うわけである。このように、小説全体から見ると、「教養」は、＜全体＞への指向とその断念（＜限定＞）の間を、緊張を孕んで揺れ動いていると解するのが正しい。しかしながら、美しき魂の場合にはこの全体への指向が全く伺えない。叔父の場合自己限定するのは自己の自覚においてであるが、美しき魂の場合はこの自覚も欠けている。自己の一面性に安住し、他の面、他の領域に盲目である。

(ii) 次に、「美しき魂」には、個と社会との相補、相促的な調和形成への指向が全く見られない点が挙げられる。叔父の知人の医者は、宗教的感情を外界と没交渉にただ自分の心の中だけで懐いていると存在をうつろにすると、その危険性を指摘し、＜活動すること＞の大切さを強調する。人との、また社会との関係を抜きにして我々の存在は考えられないし、人との交わりを抜きにして自己を知ることが不可能である。社会の中で、人々と交わりつつ活動することによって、自己を知り、社会を知り、社会における自己の位置を知り、自己を形成してゆきつつ、また同時に社会を形成してゆくというのが、そして、この二つながらの形成を同時に追求してゆき、人間の実現をめざすが、この小説の後半で展開される教養である。故に、「美しき魂」におけるこの意味での＜調和＞の欠落は、きわめて大きい欠陥と言わねばならない。

以上の肯定面と否定面を共に考慮しつつ、我々は次のように「美しき魂」を位置付けるべきであろう。即ち、教養形成が限定的教養へと移行する分岐点にあたって、この美しき魂の自己形成は、

一面的・限定的教養の典型を示すと同時に、またその陥りやすいゆがんだ教養の典型をも表わしている。この典型を踏台として限定的教養が展開されてゆくのである。これはまた、Wilhelmにとって、彼の今までの歩みの非社会性への批判ともなり、Wilhelmを活動的人間の社会集団に結びつける役割を果している。

アキスト

Goethes Werke, Hamburger Ausgabe, Band 7. 1965.

参考文献

- Briefwechsel zwischen Schiller und Goethe, Der Tempel-Verlag, Berlin und Darmstadt 1970.
 Schillers Werke, Nationalausgabe, Band 20. „Über Anmut und Würde“. Weimar 1962.
 Athenaeum, Eine Zeitschrift von A. W. Schlegel und F. Schlegel. Ersten Bandes Zweites Stück, „Über Goethes Meister“. Berlin 1798.
 Friedrich Gundolf, Goethe, Berlin 1916.
 Karl Heinemann, Goethe, Stuttgart 1922.
 Max Wundt, Goethes Wilhelm Meister und die Entwicklung des modernen Lebensideals, Berlin und Leipzig 1932.
 Karl Viëtor, Goethe. Dichtung, Wissenschaft, Weltbild. Francke Verlag, Bern und München 1949.
 Emil Staiger, Goethe, Zürich 1952—1959.
 Kurt May, Wilhelm Meisters Lehrjahre, ein Bildungsroman? Deutsche Vierteljahrsschrift, 1957.
 Hans Reiss, Goethes Romane, Francke Verlag, Bern und München 1963.
 Georg Lukács, Georg Lukács Werke, Band 7. „Goethe und seine Zeit.“ H. Luchterhand Verlag, Neuwied und Berlin 1964.
 Peter, Boerner, Goethe, Rowohlt Taschenbuch Verlag, Reinbek bei Hamburg 1964.
 Joachim Müller, Neue Goethe-Studien. Veb Max Niemeyer Verlag, Halle (Saale) 1969.
 Lothar Köhn, Entwicklungs- und Bildungsroman, Ein Forschungsbericht, J. B. Metzler Verlag, Stuttgart 1969.
 木村謙治 【ウル・マイステル研究】 弘文堂書房 1941.
 木村謙治 【マイステル研究序説】 弘文堂書房 1948.
 菊地栄一 【ゲーテの世界】 東京大学出版会 1953.
 登張正実 【ドイツ教養小説の成立】 弘文堂 1964.
 猿田 恵 【„Meister“ 改作と「教養」の行方】 「日吉論文集5」 1960.
 義則孝夫 【ドイツ教養小説初期の展開】 「人文研究」 12巻2号, 1961.
 義則孝夫 【<教養小説>の性格規定のためのスケッチ】 「人文研究」 14巻11号, 1963.
 猿田 恵 【<教養小説>の性格規定のためのスケッチ】 「日吉論文集17」 1964.
 義則孝夫 【ヴィルヘルム・マイスターの修業時代】——市民的教養小説—— 「ゲーテ年鑑」 9巻, 1967.
 柏原兵三 【「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」覚え書】 「ゲーテ年鑑」 9巻, 1967.
 義則孝夫 【「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」における「塔の結社」について】 「人文研究」 20巻5号, 1968.

註

- 1) Hamburger Ausgabe (H. A.), Band 7, S. 378.
- 2) H. A. Band 7. S. 408.
- 3) Kurt May, 前掲論文 25ページ.
- 4) Kurt May, 前掲論文 7ページ.
- 5) 登張正実, 前掲書 236ページ.
- 6) 猿田 恵, 【„Meister“ 改作と「教養」の行方】, 32ページ.
- 7) Kurt May, 前掲論文 35ページ.
- 8) Kurt May, 前掲論文 8ページ.
- 9) 【「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」における「教養」に関して】——その1. 「教養」の土台, 方向, 法則について—— (高知大学学術研究報告, 19巻6号)
- 10) H. A. Band 7. S. 291.

- 11) »Was Sie von Meister sagen verstehe ich recht gut, es ist alles wahr und noch mehr. Gerade seine Unvollkommenheit hat mir am meisten Mühe gemacht. Eine reine Form hilft und trägt, da eine unreine überall hindert und zerrt. Er mag indessen sein was er ist, es wird mir nicht leicht wieder begegnen daß ich mich in Gegenstand und in der Form vergreife, und wir wollen abwarten was uns der Genius im Herbst des Lebens gönnen mag. (Goethes Briefe, H. A. Band 2. S. 314, An Schiller, Tübingen am 30. Oktober 1797.)
- 12) 前掲論文 104~106ページ.
- 13) Emil Staiger, 前掲書 第2巻 139ページ.
- 14) Emil Staiger, 前掲書 第2巻 139ページ.
- 15) 前掲論文 105ページ.
- 16) Briefe an Goethe, Hamburger Ausgabe Band 1. S. 230, Von Schiller, Jena den 28. Juni 1796.
- 17) Friedrich Gundolf, 前掲書 515ページ.
- 18) H. A. Band 7. S. 420.
- 19) Schillers Werke, Nationalausgabe, Band 20. S. 287.
- 20) Georg Lukács, 前掲書 88ページ.
- 21) Georg Lukács, 前掲書 77ページ.
- 22) H. A. Band 7. S. 421. (第7巻の冒頭),
H. A. Band 7. S. 518. (第8巻第3章)
- 23) Max Wundt, 前掲書 210, 211ページ.
- 24) H. A. Band 7. S. 421.
- 25) H. A. Band 7. S. 406.
- 26) H. A. Band 7. S. 405.
- 27) 義則孝夫, 前掲論文 (『人文研究』20巻5号) 23ページ.

(昭和47年9月28日受理)

